

H29 東大見学会 企業・大学訪問



① ディレクトフォース・笹川平和財団夏季プログラム

東京研修 1 日目午前, 国会議事堂などが見渡せる霞が関ビルにおいてディレクトフォース・笹川平和財団夏季プログラムが行われた。初めにMission ARM Japan代表で義手開発者の近藤玄大さんによる基調講演が行われた。テーマは「ものがたりとしてのものづくり」で、近藤さんのものづくりへの考えや活動についての話だった。近藤さんは左利きなので、改札やハサミなどの世の中のほとんどのものが右利き基準になっている社会に幼い頃から疑問を抱いていたそうだ。そのことが今行っている「ものづくり」につながったのだと話されていた。私は右利きなので全くその様なことを考えたことがなかったが、確かに右利き左利きだけでなく、今の社会は多数派を基準にしている社会だと感じた。それは仕方がないことかもしれないが、その分もっと多くの人が少数派、例えば障害を持つ人などについて意識を高く持つべきだと考えた。また近藤さんは「障害者」という言葉も多数派を基準にする社会だからできたのだとも話されていた。そして近藤さんはその「障害」も「個性」だと考えて義手の開発を行っているそうだ。それまでは、手が無いという障害を隠すために義手を本物の手のように作っていた。しかし手が無いということを個性ととらえ、あえて義手と分かる黒や銀色の義手を開発した。何度も研究し、何度も改善して「ものづくり」をする苦勞のひとつひとつが「ものがたり」になっているのではないかと私は考えた。

近藤さんの基調講演後に3人のディレクトフォース・笹川平和財団の方々とグループセッションを行った。特に印象に残っているお話は、林茉莉子さんが移民・難民を対象とした非営利組織を立ち上げたきっかけのお話だ。以前、林さんは移民のフィリピン人メイドを研究していたそうだ。移民というのは留学生も含め母国以外の国で生活している人のことなのだ。だが、周囲の人々はそのことを理解せず差別をしてしまいうらい。実際そのフィリピン人メイドも働いたり生活するにあたり差別や人権侵害を受けたそうだ。それだけでなく林さんも海外で差別的なことを受けたことあったようだ。外国人だから病院で高額な治療費を請求されたり、仕事がなかなか見からず苦勞したそうだ。世界的に移民や外国人について理解することが求められていると感じた。グローバル化が進んでいる今それはますます求められるようになると思う。そして最後に林さんから大事な言葉をいただいた。「言語は単なる手段であり、あまり重要ではない。本当に大切なのは相手を理解すること。考え方を尊重すべき。」私は将来海外で働きたいと考えているので、この言葉をこころに止めておきたいと思う。また、その他2人の講師の方も建築・経済という視点から世界と日本を比べていた。そのことから、今後物事を考える上で「世界と日本」「海外と日本」という考え方は大切だと感じた。

② 企業訪問 〈四季株式会社〉

午後からは、四季株式会社(劇団四季の本社)に企業訪問に行った。四季株式会社の建物はおしゃれですが芸術を扱う会社だと感じた。私たちの班は興味のあることが俳優監督業・音楽・脚本(文学)・企画とそれぞればらばらだが、芸術というひとつのジャンルにすべて含まれていてすべてを網羅する劇団四季の裏側を知ることができて、班員全員にとって良い刺激となった。

まず、技術担当執行役員の近藤建吾さんにお話を伺った。劇団四季は慶応大学・東京大学の学生を中心に創立し来年65周年を迎える。創立当時世の中で行われていた演劇は政治的な主義主張の場になっており、それを好ましくないと考えた慶応大学・東京大学の学生が「演劇とはお客さんが楽しみに来るところ、お客さんを感動させるところだ！」と声を上げ、劇団四季ができた。その精神は今でも受け継がれていると思う。実際に劇団四季の演劇は感動するものばかりだ。私は今まで「美女と野獣」「マンマ・ミーア!」「キャッツ」「はだかの王様」を見たことがある。ストーリー・歌・ダンスすべてにおいて感動し心から楽しむことができた。10月には「アンデルセン」を見る予定で今からとても楽しみにしている。もっと仙台でも公演してほしい。

たくさん聞いたお話の中で印象に残っているのは私が一番興味を持っている音楽の話だ。劇中歌などについて詳しく教えていただいた。演劇には「レプリカ公演」「ローカルライセンス」「完全オリジナル作品」の3種類がある。「レプリカ公演」はある劇の権利を買ってそのまま演じるもので、例えばブロードウェイの「アラジン」などである。この場合音楽もそのまま使うが、演奏や音作りは自分たちで行うそう。それは音楽セクションという部署で行われる。「ローカルライセンス」というのは、ある劇をそのままではなく脚本と音楽だけなど一部の権利を買って行う演劇のことだ。「完全オリジナル作品」はその名のとおり一からオリジナルで作る演劇のことで、もちろん音楽も一から作る。時には劇団スタッフが作曲することもあるが、多くは作曲家に依頼する。劇団四季と古くからの付き合いのある作曲家はたくさんいるそう。その出来上がった曲をどのように表現するかなどを決めるのは、音楽セクションの仕事になってくる。音楽セクションの人達はみな音大出身だそう。やはり音楽を専門的に学んできた人でないといけない厳しい世界と痛感した。他に印象に残ったお話は、脚本をみんなで作っていくということだ。例えば稽古中にテンポ感などの問題で直したほうが良いとなると、その場でセリフを直したり、後に脚本家が直したりするそう。特に外国からの日本語に翻訳した歌の歌詞はアクセントが合わなくて直すことが多い。そのように繰り返し試行錯誤を重ねて作り上げられた芸術作品だからこそ、多くの人々に感動を与えることができるのだと感じた。劇団四季では美しい日本語を子供たちに伝える授業を行ったり、積極的に全国公演を行ったりと、少しでも多くの人に素晴らしい芸術



を伝えようと活動を行っている。そのお陰で私も今まで何度も感動に触れることができた。

お話を伺った後は、四季株式会社の建物を見学した。最初に建物内が全体的に暗いことが気になった。近藤さんによると劇団四季では演出のために照明や木材をとにかくたくさん使うため環境に悪い分、他では節電・節約を心掛け省エネに努めているそうだ。確かに劇団四季の舞台照明やセットは豪華でたくさんエネルギーを使っていると思っていたが、省エネに努めている事を知り何事においても意識の高い会社だと思った。トイレや廊下は「節電」の張り紙があった。また小道具やかつら・衣装を作る部屋を見学することもできた。ライオンキングのお面や鳥が無造作に置いてあり驚いた。

今回普段なかなか関わることのできない芸術の裏方の世界に触れてみて、大きな影響を受けた。なぜなら「人を感動させ、楽しませる」ことの素晴らしさと大変さ、苦労したからこそ成功した時の大きな喜びなどまだ私が経験したことのない新たな世界を知ったからだ。また、音楽の世界、芸術の世界の厳しさを改めて実感しこれからの私のピアノに対する姿勢にも影響を受けた。四季株式会社を訪問したことで将来に対する視野が広がった。この経験を糧にこれからも音楽を頑張ろうと思う。そしていつかは、音楽に限らず何らかの形で多くの人々を感動させ楽しませることができるようになりたい。

